

2019/03/10 先週のメッセージより 「アブラハムの信仰」

イエス・キリストが十字架の苦しみを受けたのは、私たちに慰めるためです。キリストの弟子になるとは、神の慰めを受け取ることなのです。その慰めを受け取る方法は、信仰を使うことです。

信仰を使って神の慰めを受け取るとはどういうことか、信仰の模範であるアブラハムを通して学びましょう。

■信仰とは、神の言葉を信じる運動である

「神は仰せられた。「あなたの子、あなたの愛しているひとり子イサクを連れて、モリヤの地に行きなさい。そしてわたしがあなたに示す一つの山の上で、全焼のいけにえとしてイサクをわたしにささげなさい。」」（創世記 22:2）

信仰とは、神の言葉を信じる運動です。神の言葉を信じて実行しようとする、人は不安になります。信仰とは、「それでも信じる」と一歩を踏み出す運動のことです。

アブラハムは、神の言葉を素直に信じて実行しようとしたため、不安になりました。なぜなら、神の命令が常識では考えられないものだったからです。愛する子を捧げるという行為は、神に従うという面から見れば、神への捧げ物であり愛の行為ですが、道徳的な視点から見れば殺人です。この矛盾を乗り越えるのは、信仰しかありません。

人々が神の言葉を受け入れない理由は、知性や理性で考えるとつまずく内容だからです。キリストが十字架で殺されて3日後に復活したことも、処女から生まれたことも、とても頭で納得することはできません。このつまずきの石を乗り越えるには、信じるしかないのです。

アブラハムは、「我が子を捧げよ」という神の命令を、信仰をもって信じることができるかという難題を、突きつけられました。難しい問題であればあるほど、神に祈って従おうとする時、本当に可能なのだろうかという不安が生じます。神の言葉を信じる運動とは、「それでも信じる」という一歩を踏み出すことです。

■信仰とは、行動が伴う運動である

「翌朝早く、アブラハムはろばに鞍をつけ、ふたりの若い者と息子イサクとをいっしょに連れて行った。彼は全焼のいけにえのためのたきぎを割った。こうして彼は、神がお告げになった場所へ出かけて行った。三日目に、アブラハムが目を上げると、その場所がはるかかなたに見えた。それでアブラハムは若い者たちに、「あなたがたは、ろばといっ

しよに、ここに残っていなさい。私と子どもとはあそこに行き、礼拝をして、あなたがたのところに戻って来る」と言った。アブラハムは全焼のいけにえのためのたきぎを取り、それをその子イサクに負わせ、火と刀とを自分の手に取り、ふたりはいっしょに進んで行った。」(創世記 22:3-6)

神の言葉を信じたアブラハムは、ろばに乗り、3日かけて神に告げられた地に出かけました。このことから、信仰とは、行動が伴う運動であることがわかります。つまり、信仰とは、ただ心で信じるだけでなく、そこから一步踏み出して、自分にできることを実行することです。本当に信じるなら、信じたとおりの行動を起こすことが必要なのです。

神に従って一步ずつ進むアブラハムでしたが、進めば進むほど、それは不可能なことに思えます。私たちも同様です。神を信じて一步を踏み出しても、現実を見ると、とても不可能なことに思え、失望がふくらみます。それでも、行動を伴わせるのが信仰なのです。

■「あきらめ」が、神の信仰に引き上げる

「イサクは父アブラハムに話しかけて言った。「お父さん。」すると彼は、「何だ。イサク」と答えた。イサクは尋ねた。「火とたきぎはありますが、全焼のいけにえのための羊は、どこにあるのですか。」アブラハムは答えた。「イサク。神ご自身が全焼のいけにえの羊を備えてくださるのだ。」こうしてふたりはいっしょに歩き続けた。ふたりは神がアブラハムに告げられた場所に着き、アブラハムはその所に祭壇を築いた。そうしてたきぎを並べ、自分の子イサクを縛り、祭壇の上のたきぎの上に置いた。」(創世記 22:7-9)

目的地のモリヤの地が目前に迫ると、アブラハムはイサクだけを連れて神に命じられた場所に向かいました。アブラハムはイサクをいけにえにする道を進みながらも、神が奇跡を起こしてくださることを期待していましたが、何も起きませんでした。彼は、ついにイサクを縛り上げ、たきぎの上に乗せたのです。アブラハムの心境はどのようなものだったのでしょうか。

神の言葉を信じてついていったら、結局行き着いたところは絶望だったのです。もうイサクの命を断つしかないところまで追いつめられ、アブラハムは完全にあきらめました。しかし、この「あきらめ」こそが、大切なのです。

なぜなら、ここまでは人の力でできる信仰だからです。私たちは、自分の力で頑張り、なかなかあきらめるということをしません。しかし、「自分にできることは何もない」と自分の無力を覚えて絶望する時、進むべき道は神に助けを乞うことしか残っていないのです。神との間に自分を飾るものも誇るものも失ってしまったこの時こそ、人間の信仰の限界を知り、神の信仰を燃やすチャンスなのです。

では、この時のイサクの心境はどのようなものだったのでしょうか。イサクもまた「絶望」の中にあっただけです。抵抗しても、叫んでも、お父さんは助けてくれません。イサクはも

う神に助けを求めるしかありませんでした。しかし、このことは、逆に、アブラハムにとっては慰めになりました。息子が神を頼る信仰を手にしたのです。アブラハムにとっては、息子が神への信仰を失うより、父をひとでなしと認めてくれたほうが、数倍も慰めです。

これまでイサクの信仰はお父さんを通した信仰でした。お父さんから教えられたことを信じ、守ることが、イサクにとっての信仰だったのです。しかし、今、父の助けを失い、自分と神様をつないでくれるものがなくなった時、イサクは直接神様に助けを求めるしかなくなりました。イサクはこの時初めて、親ではなく、直接神様を頼る信仰を持ったのです。ここに奇跡が起こります。それは平安という奇跡です。

■信仰とは、すべてを獲得する運動である

「アブラハムは手を伸ばし、刀を取って自分の子をほふるうとした。そのとき、主の使いが天から彼を呼び、「アブラハム。アブラハム」と仰せられた。彼は答えた。「はい。ここにおります。」御使いは仰せられた。「あなたの手を、その子に下してはならない。その子に何もしてはならない。今、わたしは、あなたが神を恐れることがよくわかった。あなたは、自分の子、自分のひとり子さえ惜しまないでわたしにささげた。」アブラハムが目を上げて見ると、見よ、角をやぶにひっかけている一頭の雄羊がいた。アブラハムは行って、その雄羊を取り、それを自分の子の代わりに、全焼のいけにえとしてささげた。そうしてアブラハムは、その場所を、アドナイ・イルエと名づけた。今日でも、「主の山の上には備えがある」と言い伝えられている。」(創世記 22:10-14)

アブラハムは、イサクを捧げたことによって、イサクを取り戻しました。信仰とは、すべてを獲得する運動です。私たちが、あきらめ、すべてを捨てた時、神は信仰を通してすべてを獲得させ、平安を得させてくださるのです。これが、信仰で慰めを得るということです。あなたは、神があなたを助け、問題を解決してくださることを、信仰で見ることができるようになるのです。これが神の信仰です。あなたがあきらめる時初めて、神の助け、神の慰めがわかるようになるのです。

神は私たちの弱さのうちに完全に働かれる方です。絶望し、「もうダメだ」と自分の無力を知れば知るほど、神が見えるようになります。そして、神はあなたを助け、あなたが失った者は、すべて手に入れられることを見せてくれるのです。これは、人ではなく、神がさせてくださることです。これこそ、神が下さる平安です。

私たちが本当に神の前にへりくだって、「できません」と告白する時、神様は必ず助けてくださいます。反対に、「自分にはできます」「頑張ります」と言うなら、神はあなたを助けません。

このことをアブラハムから学ぶことができます。

■信仰によって慰めを得るとは

「信仰によって、アブラハムは、試みられたときイサクをささげました。彼は約束を与えられていましたが、自分のただひとりの子をささげたのです。神はアブラハムに対して、「イサクから出る者があなたの子孫と呼ばれる」と言われたのですが、彼は、神には人を死者の中からよみがえらせることもできる、と考えました（信じました）。それで彼は、死者の中からイサクを取り戻したのです。これは型です。」（ヘブル 11:17-19）

アブラハムは、イサクを捧げたことで、イサクを取り戻しました。これは、すべてをあきらめることで、すべてを手に入れることができるということを、私たちに教えています。私たちがこの世界のものに対してあきらめる時、私たちはすべてを手にするのです。

なぜなら、私たちの世界は有限であり、いずれ滅びます。しかし、永遠はすべてを飲み込み、滅びることがありません。私たちが永遠に足を踏み入れ、そこにしっかりとしがみつくなれば、有限であるこの世界は飲み込まれ、すべてのものを手に入れることができるのです。アブラハムがイサクを取り戻したのは、この信仰の型なのです。

アブラハムは、イサクを捧げたことで、まず、信仰でイサクを取り戻しました。神は永遠なる方だから、イサクは死んでもよみがえることができると信じたのです。このことを信じて、イサクを縛り、剣を持ったその瞬間、この信仰に火がつき、確信に変わりました。神が信仰に応答なさったのです。

「神には人を死者の中からよみがえらせることもできると信じた」というアブラハムの信仰は、まさに剣を振り上げた瞬間にわいてきた信仰です。ただし、その信仰がわいてきたのは、すでにイサクを縛り、剣を握っていた時に、神の言葉を信じていたからです。もし信じていなくて、縛り上げた時、「神様、ここまでです。これ以上できません。赦してください。」と言うこともできたはずですが。

つまり、アブラハムが「イサクはよみがえる」という確信を持つことができたのは、信じていることができたからです。この信仰が重要なのです。

「信仰は望んでいる事がらを保証し、目に見えないものを確信させるものです。」

（ヘブル 11:1）

全てを手にするとは、見えないものを確信することです。これが私たちにとっての平安になります。私たちがこの世界に依存し、この世界から慰めを得ることをあきらめた時、神が見えるようになり、神の愛に支えられて天国を見ることができるようになります。すると、それまで望みとして持っていた信仰が確信に変わり、それが安息になるのです。

「これらの人々はみな、信仰の人々として死にました。約束のものを手に入れることはありませんでしたが、はるかにそれを見て喜び迎え、地上では旅人であり寄留者であることを告白していたのです。」（ヘブル 11:13）

平安とは、神の約束をはるかに見て喜ぶことです。これが安息なのです。神は私たちに、信仰にとどまり、この平安を手に入れてほしいと願っておられます。そして、この信仰にとどまることによって、見える状況がどうであれ、平安を手にすることができるようになるのです。見えるものは一時的であり、やがて過ぎ去ります。しかし、神の愛、神の平安はいつまでも残るものです。その平安をアブラハムは手に入れました。それが信仰の型なのです。

神の言葉を信じて踏み出すと、本当に神の言葉を信じて進んでよいのか不安が生まれます。この不安は、見えるもので解決することはできません。アブラハムはその不安と向き合いましたが、ただただ不安が増し加わり、ついに自分の力ではどうすることもできないと気づきます。その時、アブラハムは、神の平安、安息を手にしたのです。

私たちの本当の問題は、見える出来事が困難なことではなく、神の平安がないことです。自分を不安にさせているのは出来事ではありません。必要なのは、神の平安です。それは信仰で手にするものです。自分が不安でどうにもならないと気づいた時、信仰に火がつき、神がまことの安息を与えてくださり、神の安息が見えるようになります。

私たちがアブラハムの信仰から学ぶべきことは、本当の意味であきらめることです。「本当の意味であきらめる」とは、「どうでもいい」と放り出すことではありません。それは、「どうでもいい」という思いにしがみついているに過ぎず、本当の意味でのあきらめではありません。「本当のあきらめ」とは、自分が握りしめているもの——見えるところの安心を完全に手放し、必死になって神を見上げようとすることです。それには絶望を引き受ける勇気が必要です。見えるもので解決しようとする、ただ「もうダメだ」という状態が維持されていくだけです。絶望し、本当にあきらめて、「神様助けてください」と叫ぶ時、神と私たちの間にあったプライドや虚勢が取り払われて、ただ十字架が見え、神の愛が見え、神の奇跡が起きます。その奇跡とは、平安です。これが慰めを手にする方法なのです。